

——カラオケの歴史はサービス業の変遷でもある、といわれます。

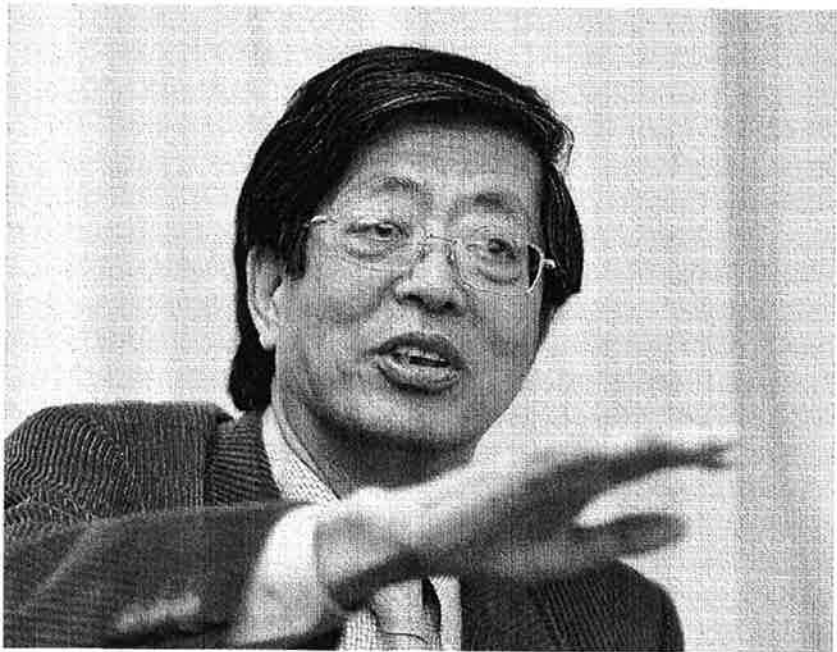
前川 10年ほどにイノベーションが起こっています。サービス業としては現在、ブロードバンドによるインターネットの発展とともに大きな変化を迎えています。そういう面では、若者にとって非常に面白い勉強材料だと思います。

——国民のニーズをメーカーがうまくとらえたのですね。

前川 大企業にある技術のシーズ(種)と、慰安旅行のバスでも歌を歌いたい、あるいはスナックの客費を削りたいといった末端のニーズ、そしてうまく歌いたいというお客様のウォンツ(願望)。この3つがうまく絡み合った分かなりやすい例だと思うんです。どんな産業でもシーズとニーズ、ウォンツのタイミングがきっちり合ったときに、イノベーションというものは起こります。

——そのイノベーションで駆逐された業種もあります。

関西外国語大教授 前川洋一郎さん



変革はシーズ、ニーズ、ウォンツから

前川 流しの歌手にも新しくカラオケを始めて時代の変換期を乗り切っている人もいます。

サーフィンをしていてカラオケという大波が来た。そこで落ちる者と波に乗り切る者がいる。次にレーザードイスという波が来て、乗れない者と乗り切る者が出る。日本人のたくましさ、生き残りの知恵が試されてきたんです。今の若者にもそういうたくましさが必要なはず。サーフボードから落ちてまた乗る。たくましく生きてい

てほしいと思います。——イノベーションのために、産業界と大学などの研究機関との連携の必要性が叫ばれています。

前川 「産学連携」というと、大企業と大学だけがくっつくように感じられませんが、偏りすぎだと思っています。企業と大学の役割をはっきりと見直さないといけません。そして、役所や中小企業、個人商店などいろんなところと大学が連携しないといけません。いまは大企業も大学も互いにもたれすぎているので

はないかと思っています。大学には、高等な学問を学ばせる役割と、社会に役立つ技術・技能を身につけさせる役割とがあります。またいろんな人と接して、さまざまな見地から人間を磨く人間教育の場でもあります。

この3つのバランスが崩れていますし、企業も綱張り忘れて学生を早く取りたがっています。

——(自身の会社時代(松下電器産業)を振り返るときどうですか

前川 市場占有率(シェア)とか右肩上がりとか業界順位とか。そんなことばかり考えていました。でも、実際に世の中を見ていると、会社というのは無責任につまわりたり経営者がほり出したりすることも多いので、いったい会社とは何なのかと思うようになっていきました。

会社としては売り上げや利益、雇用もありますが、継続することの方が、社会的責任は大きいんじゃないかと思っています。

(聞き手 南昇平)

